

⑤昆虫類

◇調査結果一覧（ウォンテッド調査、調査員によるフィールド調査、越冬幼虫調査）

RD	目	種名	A地区				B地区				C地区				C集計	総計	
			市民		調査員		市民		調査員		市民		調査員				
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫			
	チョウ目	アゲハ			1	1			1	1					2	4	7
	チョウ目	アオスジアゲハ				2			1						1	0	3
	チョウ目	クロアゲハ							1						1	1	2
	チョウ目	カラスアゲハ							1						1	0	1
	チョウ目	ミヤマカラスアゲハ				1								0	0	1	
	チョウ目	モンキアゲハ				1								0	0	1	
北上種	チョウ目	ナガサキアゲハ			1	1								0	1	2	
	チョウ目	オナガアゲハ			1	1								0	0	1	
	チョウ目	アオスジアゲハ			1	1								1	0	2	
外来種	チョウ目	ホソオチョウ			0	0								0	1	1	
	チョウ目	モンシロチョウ			0	0				3				3	1	4	
	チョウ目	ウスハシロチョウ			3	3				1				1	1	5	
	チョウ目	スジグロシロチョウ			2	2				3				3	0	5	
	チョウ目	モンキチョウ			0	0				1				1	1	2	
	チョウ目	キチョウ			1	1				1				1	0	2	
	チョウ目	アカタテハ			1	1				1				1	1	3	
	チョウ目	キタテハ			0	0				1				1	1	2	
	チョウ目	ルリタテハ			0	0				1				1	0	1	
	チョウ目	サカハチチョウ			1	1								0	0	1	
	チョウ目	サトキマダラヒカゲ			1	1				1				1	0	2	
	チョウ目	コムシジ			1	1				2				2	0	3	
北上種	チョウ目	クロノマチョウ			1	1								0	0	1	
	チョウ目	ウスイロノマチョウ			0	0								0	1	1	

EX:絶滅 EW:野生絶滅 CR:絶滅危惧ⅠA類 EN:絶滅危惧ⅠB類 VU:絶滅危惧Ⅱ類 NT:準絶滅危惧 DD:情報不足 *:留意種 -:予一タ無し ・:非分布

RD	目	種名	A地区				B地区				C地区				C集計	総計
			市民		調査員		市民		調査員		市民		調査員			
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫		
北上種	チョウ目	ツマグロヒョウモン					0	2						2	1	3
	チョウ目	オオムラサキ	1	3	4	8	1	5						11	3	22
外来種	チョウ目	ゴマダラチョウ		4	5	9	1	4						6	3	18
	チョウ目	アカボシゴマダラ	2	3	1	6	1	2						5	11	22
	チョウ目	スミナガシ		1		1								0	0	1
	チョウ目	コシヤノメ				0		1						1	0	1
	チョウ目	ヒガゲチョウ				0		1						1	0	1
	チョウ目	クロヒカゲ				0		1						1	0	1
	チョウ目	アサギマダラ		4		4								0	1	5
	チョウ目	ウラギンジミ				0		2						2	0	2
	チョウ目	ヤマトジミ				0		2						2	0	2
	チョウ目	ルリシジミ		1		1		2						2	0	3
	チョウ目	ベニシジミ		1		1								0	0	1
	チョウ目	ゴイシジミ				0		1						1	0	1
	チョウ目	トラフシジミ		1		1								0	0	1
	チョウ目	イチモンジセセリ		1		1		1						1	0	2
	チョウ目	ダイミョウセセリ				0		1						1	0	1
	チョウ目	チャハネセセリ				0		1						1	0	1
	チョウ目	オオミズアオ		2		2	3	1						4	13	22
都VU	チョウ目	イボタガ				0								0	1	1
	チョウ目	シロビクロナミシヤク		1		1								0	0	1
	チョウ目	オオミノガ			1	1								0	0	1
	チョウ目	カノコガ				0		1						1	0	1
	チョウ目	ヒゲナガガ				0		1						1	0	1
	コウチュウ目	カブトムシ	1	1	2	4		1						1	1	6
	コウチュウ目	コカブトムシ			1	1								1	0	2

EX:絶滅 EW:野生絶滅 CR:絶滅危惧IA類 EN:絶滅危惧IB類 VU:絶滅危惧II類 NT:準絶滅危惧 DD:情報不足 *:留意種 一:子一:夕無し・非分布

RD	目	種名	A地区				B地区				C地区				C集計	総計
			市民		調査員		市民		調査員		市民		調査員			
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫		
	コウチュウ目	カナブン				1								2	1	4
	コウチュウ目	アオカナブン				0								1		1
	コウチュウ目	コアオハナムグリ				1								0		1
	コウチュウ目	クロハナムグリ				1								0		1
	コウチュウ目	セマダラコガネ				0								1		1
	コウチュウ目	マメコガネ				1								1		2
	コウチュウ目	ノコギリクワガタ				1								3	7	12
	コウチュウ目	ミヤマクワガタ				0								3		3
	コウチュウ目	ゴマダラカミキリ				0								1	1	2
	コウチュウ目	アカハナカミキリ				0								1		1
	コウチュウ目	ベニカミキリ				0								1		1
	コウチュウ目	タマムシ				2	11							14	52	69
	コウチュウ目	ウバタマムシ				0	1							1		1
	コウチュウ目	ハンミョウ				0	1							1	1	2
	コウチュウ目	ゲンジボタル				4								0	1	5
	コウチュウ目	ヘイケボタル				0								3		3
	コウチュウ目	ウリハムシ				1								0		1
	コウチュウ目	ルリマルノミハムシ				1								0		1
	コウチュウ目	クロウリハムシ				0								1		1
都一	コウチュウ目	ハツカハムシ				0								1		1
都VU	コウチュウ目	スゲハムシ				0								1		1
都一	コウチュウ目	オサムシモドキ				1								0		1
	コウチュウ目	キマワリ				0								1		1
	コウチュウ目	モモトカミキリモドキ				0								1		1
	コウチュウ目	ジョウカイボシ				1								0		1
	コウチュウ目	トホシテントウ				0								1		1

EX:絶滅 EW:野生絶滅 CR:絶滅危惧IA類 EN:絶滅危惧IB類 VU:絶滅危惧II類 NT:準絶滅危惧 DD:情報不足 *:留意種 -:データ無し ・:非分布

RD	目	種名	A地区				B地区				C地区				C集計	総計	
			市民		調査員		市民		調査員		市民		調査員				
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫			
	コウチュウ目	ナナホシテントウ			1				1						1	0	2
	コウチュウ目	ヒメクロオトシブミ			1				1						1	0	2
	ハチ目	オオスズメバチ							1						1	0	1
	ハチ目	トラマルハナバチ							1						1	0	1
	ハチ目	スズバチ			1									1	0	1	2
	ハチ目	トックリバチ												1	0	1	1
	ハエ目	アカウシアブ							1					1	0	1	1
	ハエ目	ウシアブ							1					1	0	1	1
	ハエ目	シオヤアブ			1									0	0	1	1
	ハエ目	ハナアブ			1									0	0	1	1
	ハエ目	マヒラタアブ			1									0	0	1	1
	カメムシ目	アブラゼミ			2								3	2	3	3	8
	カメムシ目	ミンシゼミ		1	1								1	4	1	4	7
	カメムシ目	ニイニイゼミ			3								2	2	2	0	5
	カメムシ目	ツクツクボウシ			2								1	1	1	3	7
	カメムシ目	ヒグラシ			3								2	1	1	2	7
	カメムシ目	クマゼミ		1	1								0	2	0	2	6
	カメムシ目	マツモムシ			1								3	0	3	1	5
	カメムシ目	ミスカマキリ							4				4	2	4	2	6
	カメムシ目	アメンボ			1								1	1	1	0	2
	カメムシ目	ウスハハゴロモ											1	1	1	0	1
	カメムシ目	アオハハゴロモ											1	1	1	0	1
	カメムシ目	ゲンバヤムシ											1	1	1	0	1
	カメムシ目	シラホシスカンヨコバイ											1	1	1	0	1
	カメムシ目	ツマグロオオヨコバイ											1	1	1	0	1
	カメムシ目	ベッコウハゴロモ											1	1	1	0	1

EX:絶滅 EW:野生絶滅 CR:絶滅危惧IA類 EN:絶滅危惧IB類 VU:絶滅危惧II類 NT:準絶滅危惧 DD:情報不足 *:留意種 一:一タ無し ・:非分布

RD	目	種名	A地区				B地区				C地区				C集計	総計			
			市民		調査員		市民		調査員		市民		調査員						
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫					
	トンボ目	ギンヤンマ				1						1					3	5	
	トンボ目	オニヤンマ	1			3			1			1						0	4
	トンボ目	コシアキトンボ				0	1					1						0	1
	トンボ目	シオカラトンボ				2	1		3			4	1					1	7
	トンボ目	オオンオカラトンボ				0			1			1						0	1
	トンボ目	シオヤトンボ				0						0	1					1	1
都NT	トンボ目	ヒメアカネ				0			1			1						0	1
	トンボ目	マユタテアカネ				0			1			1						0	1
	トンボ目	マルタンヤンマ				0			1			1						0	1
	トンボ目	ミヤマアカネ				1		1	2			2		1				1	4
	トンボ目	アサヒナカワトンボ				1		1				1						0	1
	トンボ目	ハグロトンボ				0			1			1						0	1
	トンボ目	アジアイトトンボ				0			1			1						0	1
都VU	トンボ目	オオイトトンボ				0			1			1						0	1
都DD	トンボ目	モノサシトンボ				0			3			3						0	3
	カワゲラ目	カワゲラ				1		1				1						0	1
	シミ目	イシノミ				0			1			1						0	1
	ハッタ目	トノサマハッタ				0						0		1				1	1
	ハッタ目	クルマハッタモドキ				0			1			1						0	1
	ハッタ目	ショウリヨウハッタ				0			1			1						0	1
	ハッタ目	オンプハッタ				1		1				1						0	2
	ハッタ目	ハネナガイナゴ				0			1			1						0	1
	ハッタ目	コハネイナゴ				0			1			1						0	1
	ハッタ目	ミヤマフキハッタ				0			1			1						0	1
	ハッタ目	エンマコオロギ				0			2			2						0	2
	ハッタ目	ツツレサセコオロギ				0			1			1						0	1

EX:絶滅 EW:野生絶滅 CR:絶滅危惧IA類 EN:絶滅危惧IB類 VU:絶滅危惧II類 NT:準絶滅危惧 DD:情報不足 * 留意種 - :データ無し ・:非分布

RD	目	種名	A地区				B地区				C地区				C集計	総計
			市民		調査員		市民		調査員		市民		調査員			
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫		
	ハツタ目	カンタン												1	0	1
	ハツタ目	キリギリス												1	0	1
	ハツタ目	クサキリ												0	1	1
	ハツタ目	ヤブキリ												1	0	1
	ハツタ目	クダマキモトキ												1	0	1
		総計	10	1	85	11	31	123	13	167	110	2	26	7	145	419

EX:絶滅 EW:野生絶滅 GR:絶滅危惧ⅠA類 EN:絶滅危惧ⅠB類 VU:絶滅危惧Ⅱ類 NT:準絶滅危惧 DD:情報不足 *:留意種 - :データ無し •:非分布

※昆虫類調査結果一覧（深沢地区定点調査）

目	種名	備考
チョウ目	アオスジアゲハ	
チョウ目	アカタテハ	
チョウ目	アカボシゴマダラ	外来種
チョウ目	アサギマダラ	
チョウ目	イチモンジセセリ	
チョウ目	イチモンジチョウ	
チョウ目	ウスバシロチョウ	
チョウ目	ウラギンシジミ	
チョウ目	ウラナミシジミ	
チョウ目	スジグロシロチョウ	
チョウ目	スミナガシ	
チョウ目	ダイミウゼセリ	
チョウ目	チャバネセセリ	
チョウ目	ツバメシジミ	
チョウ目	ツマクロヒョウモン	北上種
チョウ目	テングチョウ	
チョウ目	ナガサキアゲハ	北上種
チョウ目	ナミアゲハ	
チョウ目	ヒオドシチョウ	
チョウ目	ベニシジミ	
チョウ目	ミドリヒョウモン	
チョウ目	ムラサキシジミ	
チョウ目	モンキアゲハ	
チョウ目	ヤマトシジミ	
チョウ目	ルリシジミ	
チョウ目	ルリタテハ	
チョウ目	オオムラサキ	
チョウ目	オナガアゲハ	
チョウ目	カラスアゲハ	
チョウ目	キアゲハ	
チョウ目	キタテハ	

目	種名	備考
チョウ目	キチョウ	幼
チョウ目	クロコノマチョウ	北上種
チョウ目	ゴジャノメ	
チョウ目	ゴマダラチョウ	
チョウ目	コムシ	
チョウ目	サカハチチョウ	
チョウ目	サトキマダラヒカゲ	
チョウ目	アケビコノハ	
チョウ目	イラガ	
チョウ目	エビガラスズメ	
チョウ目	オオミズアオ	
チョウ目	カギモンヤガ	
チョウ目	カノコマルハキバガ	
チョウ目	キンハネチドリバ	
チョウ目	コトラガ	
チョウ目	シロビクロナミアシヤク	
チョウ目	シロモンノメイガ	
チョウ目	ゼニガサミズメイガ	
チョウ目	ツمامモンヒゲナガ	
チョウ目	テングイラガ	
チョウ目	ネグロミノガ	幼のみ
チョウ目	ヒメクロホウジャク	
チョウ目	フタホリコヤガ	幼のみ
チョウ目	フタホシシロエダシヤク	幼のみ
チョウ目	ヨツスジヒメシクイ	
チョウ目	アオサムシ	
チョウ目	アオカミキリモドキ	
チョウ目	アオハムシダマシ	
チョウ目	アカハナカミキリ	
チョウ目	アトボシハムシ	
チョウ目	ウスバカミキリ	

目	種名	備考
コウチュウ目	ウリハムシ	
コウチュウ目	オオナガコメツキ	
コウチュウ目	オオヨツスジハナカミキリ	
コウチュウ目	オハバポタル	
コウチュウ目	カナブン	
コウチュウ目	カブトムシ	
コウチュウ目	キペリトゲトゲ	
コウチュウ目	キボシカミキリ	
コウチュウ目	キマワリ	
コウチュウ目	クチキムシ	
コウチュウ目	クロウリハムシ	
コウチュウ目	クロボシタマムシ	
コウチュウ目	クロボシツツハムシ	
コウチュウ目	ゲンシポタル	
コウチュウ目	コアオハナムグリ	
コウチュウ目	コカブトムシ	
コウチュウ目	コクロヒメテントウ	
コウチュウ目	シロスジカミキリ	
コウチュウ目	スジクワガタ	
コウチュウ目	セマダラコガネ	
コウチュウ目	セモンジンガサハムシ	
コウチュウ目	トホシテントウ	
コウチュウ目	ナナホシテントウ	
コウチュウ目	ナミテントウ	
コウチュウ目	ニジュウヤホシテントウ	幼
コウチュウ目	ニワハシミョウ	
コウチュウ目	ハンノキハムシ	
コウチュウ目	ヒメアカハナカミキリ	
コウチュウ目	ヒメカメノコテントウ	
コウチュウ目	ヒメクロオトシブミ	
コウチュウ目	ヒメコガネ	

EX:絶滅 EW:野生絶滅 CR:絶滅危惧ⅠA類 EN:絶滅危惧ⅠB類 VU:絶滅危惧Ⅱ類 NT:準絶滅危惧 DO:情報不足 *:留意種 -:データ無し ・:非分布

目	種名	備考
コウチュウ目	ピロウドコガネ	
コウチュウ目	フタコブシリハナカミキリ	
コウチュウ目	マメコガネ	
コウチュウ目	モモフトカミキリモドキ	
コウチュウ目	ヤトセズジショウカイ	
コウチュウ目	ヨツキボシカミキリ	
コウチュウ目	ヨモギハムシ	
コウチュウ目	ラミーカミキリ	
コウチュウ目	リンゴコフキゾウムシ	
コウチュウ目	ルリマルノミハムシ	
ハチ目	キアシナガバチ	
ハチ目	キイロスズメバチ	
ハチ目	クマバチ	
ハチ目	クロマルハナバチ	都DD
ハチ目	スズバチ	
ハチ目	セグロアシナガバチ	
ハチ目	トラマルハナバチ	
ハチ目	ピロウドツリアブ	
ハチ目	ムネアカオオアリ	
ハチ目	ルリチュウレンジ	
ハエ目	シオヤアブ	
ハエ目	シモフリシマバエ	
ハエ目	マダラアシナガバエ	
ハエ目	マダラガガンボ	
アミメカゲロウ目	ウスモンヒロバカゲロウ	
アミメカゲロウ目	ヘビトンボ	幼
アミメカゲロウ目	ヤマトクロスジヘビトンボ	
シリアゲムシ目	ヤマトシリアゲ	
トビケラ目	トビイロトビケラ	
トビケラ目	ニンギョウトビケラ	幼のみ
トビケラ目	ヒゲナガカフトビケラ	幼

目	種名	備考
トビケラ目	フトヒゲカクツツトビケラ	幼
カメムシ目	アオハハゴロモ	
カメムシ目	アカスジヒゲブトメクラガメ	
カメムシ目	アブラゼミ	
カメムシ目	アメンボ	
カメムシ目	オオクモヘリカメムシ	
カメムシ目	オオトゲシラホシカメムシ	
カメムシ目	クサギカメムシ	
カメムシ目	クモヘリカメムシ	
カメムシ目	コバネナガカメムシ	
カメムシ目	シロオビアワフキ	幼
カメムシ目	スケバハゴロモ	
カメムシ目	チャバネアオカメムシ	
カメムシ目	ツマグロオオヨコバイ	
カメムシ目	ツマグロヨコバイ	
カメムシ目	ナガメ	
カメムシ目	ニイニゼミ	
カメムシ目	ヒグラシ	
カメムシ目	ヒゲナガカメムシ	
カメムシ目	ベッコウハゴロモ	幼
カメムシ目	ホオズキカメムシ	
カメムシ目	マルカメムシ	
カメムシ目	ヨコツナサシガメ	幼のみ
トンボ目	アキアカネ	
トンボ目	アサヒナカフトンボ	幼
トンボ目	オオシオカラトンボ	
トンボ目	オナガサナエ	
トンボ目	オニヤンマ	
トンボ目	コオニヤンマ	幼
トンボ目	シオカラトンボ	
トンボ目	タカネトンボ	幼

目	種名	備考
トンボ目	ダビドサナエ	
トンボ目	ネキトンボ	
トンボ目	ヒメアカネ	都NT
トンボ目	ホソサナエ	都NT
トンボ目	ミヤマアカネ	
トンボ目	ミヤマカフトンボ	幼
トンボ目	ミルンヤンマ	幼
カワゲラ目	ノギカワゲラ	幼のみ
カワゲラ目	ミジカオカワゲラ	
カゲロウ目	アカマダラカゲロウ	幼
カゲロウ目	エルモンヒラタカゲロウ	
カゲロウ目	キイロヒラタカゲロウ	
カゲロウ目	キハダヒラタカゲロウ	幼のみ
カゲロウ目	チラカゲロウ	幼
カゲロウ目	トウヨウモンカゲロウ	
カゲロウ目	ミヤマタニガワカゲロウ	幼
カゲロウ目	モンカゲロウ	
ハツタ目	ウマオイ	幼
ハツタ目	キリギリス	
ハツタ目	ササキリ	幼
ハツタ目	サトクダマキモドキ	
ハツタ目	セスジツユムシ	幼
ハツタ目	ツツレサセコオロギ	
ハツタ目	ノミハツタ	
ハツタ目	ヒシハツタ	幼
シミ目	イシノミ	
カマキリ目	コカマキリ	
ナナフシ目	トゲナナフシ	
ナナフシ目	ナナフシモドキ	幼のみ
ハサミムシ目	コブハサミムシ	幼のみ

EX:絶滅 EW:野生絶滅 CR:絶滅危惧ⅠA類 EN:絶滅危惧ⅠB類 VU:絶滅危惧Ⅱ類 NT:準絶滅危惧 DD:情報不足 *:留意種 一:子一タ無し ・:非分布

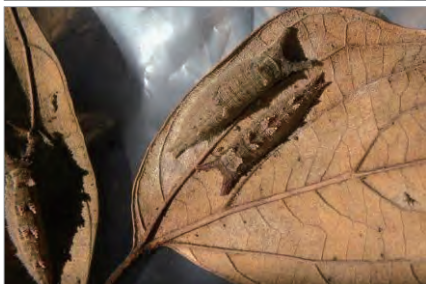
◇主な昆虫類

• オオムラサキ



幼虫は、A 地区、B 地区の山地や丘陵で確認され、C 地区では確認できなかったが、成虫は、市街地でも目撃情報があり、山地や丘陵を中心に分布していると思われる。

※ゴマダラチョウは、オオムラサキと一緒に見られることが多く、オオムラサキより個体数が多いと考えられる。



右：オオムラサキ幼虫

左：オオムラサキと食草を同じくする近縁種のゴマダラチョウの幼虫

• アカボシゴマダラ



ゴマダラチョウと生態を同じくする外来種である。市街地の公園などの人工的な環境に適応するとされており、市内でも広く分布が拡大していることが確認された。

• オオミズアオ



大型の青白色をしたガで、羽が三角形にとがり、後方に伸びて尾状になる。市内では人の目が多い C 地区からの情報が多かったが、全域に生息していると思われる。

• タマムシ



情報数が 68 件と圧倒的に多い。俊敏な昆虫でもあり、これほどの目撃があることは予想できなかった。特に人目の多い C 地区での情報が多く、市街地の中の古い樹木などにも幼虫が生息していると考えられる。

・ミヤマクワガタ



標高の高い山間部によく見られ、人間の手つかずの自然が残る環境を好む。

市民からの目撃情報はなく、調査員による確認のみである。かつては、市街地でも多少の目撃はあったが、近年は気候の変化（温暖化）や市街地化など生息環境の変化に伴い、減少していると考えられる。

・ノコギリクワガタ



平地から山地まで生息し、クヌギ・コナラ等集まる。

C 地区での目撃が多いように、山間部のほか、市街地部でも見受けられる。大きな減少には至っていないと考えられる。

・マツモムシ



生活環境が限られているため市民からの目撃情報はなかった。かつては、市内の水田などで頻繁に見かけたが、水田の減少など、水環境の変化により減少していると考えられる。

・ミズカマキリ



B 地区、C 地区で目撃情報があるように、比較的現代環境に適応した種といえるが、水田、池などの環境変化によってその数を減らしていると考えられる。

・ハンミョウ



成虫の大きさは 2cm 程で、春から秋まで日当たりのよい舗装されていない道路や山道、河原などで見かけることがある。ハンミョウの目撃情報が2件と少ないが、動きが速いため目撃するのが稀であることや、土の露出している道が減ったことなどが理由と考えられる。

・ギンヤンマ



山間部をはじめとする水路など、流れのある水域で見かけるオニヤンマは、現在も、山間部に限らず市内各所で見かけられる。一方、池、田など流れがない水域で見かけるギンヤンマは、オニヤンマほど目立たないこともあるが、目撃情報は少なく、水田の減少などにより減少していると考えられる。

・ハルゼミ



鳴き声はわりと大きいが生息地に入らないと聞くことができないこと、鳴き声をする時期が名前のとおり春（4～6月頃）で、注意を引かないこともあり、生息確認はできなかった。現在、東京都レッドリスト 2010 年版にて絶滅危惧種になっている。

（※この写真は、2001 年に青梅市で杉村健一氏により撮影されたものである。）

・ニイニイゼミ



平地の明るい雑木林に生息し、サクラの木によく集まり、人の手が届くような低い枝にもよくとまる。小型で保護色であることから目撃情報は少ないが、市内に広く分布していると考えられる。

なお、C 地区において市民の方が独自に調査され、平成 24 年 7 月終盤の 1 日の調査で、200 本の樹木に 100 個の抜け殻があったという報告も受けている。

・クマゼミ

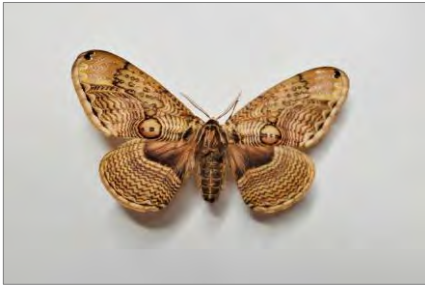


（標本）

温暖な地域の平地や低山地に生息し、都市部の公園や街路樹などにも多い。

かつては、西日本地域を中心に生息していたが、気候変化（温暖化）により分布が拡大したともいわれられており、近年市内でも見かけるようになった。

・イボタガ



(標本)

里山の雑木林などを主な生息地とし、かつては緑地やその周辺の住宅地にも生息していたが、現在は東京都の絶滅危惧種に指定している貴重な種である。市内で幼虫が1件（生息地が1か所）確認された。

・ホソオチョウ



40 数年前に東京都日野市で初めて野生化した個体が発見された北東アジアからの外来生物である。東京を中心とした都県、京都府、神戸市、山口県などで生息が確認されている。あきる野市での生息は今回の調査で初めて確認された。今までの国内の観察例では、発見場所での生息は一時的な場合が多く、定住しないことが知られている。定住しない原因は不明である。

・ツマグロヒョウモン



北上種の代表であり、近年、あきる野市でも全域で普通に見られるようになった。繁殖は4月から11月頃まで年数回行われる。食草はスミシ類で、パンジーやビオラなどの園芸種も食べる。

⑥水生生物

◇調査結果一覧（ガサガサ調査）

	RD	種名	平成24年 9月9日	平成23年 9月17日	平成22年 8月22日	平成21年 9月13日	平成16年 7月25日
魚類	国VU,都VU	ギバチ	10	0	10	5	○
	国NT,都VU	カジカ	7	1	0	0	△
	都VU	ジュスカケハゼ	11	122	75	21	○
	都NT	カマツカ	1	2	1	1	×
	都NT	シマドジョウ	4	21	14	9	×
	国EN,都VU	ホトケドジョウ	0	0	0	0	○
	国内外来種	カワムツ	46	22	46	13	○
	国内外来種	オヤニラミ	0	0	1	13	×
	国内外来種	ムギツク	1	1	0	1	×
	都CR	アブラハヤsp	16	0	9	8	○
		モツゴ	0	0	3	0	×
		ドジョウ	2	2	2	0	×
		ヨシノボリ	27	1	1	0	×
		フナsp	2	1	1	0	×
	* ナマズ	0	1(目視)	0	0	×	
	不明稚魚	多	—	多	55		
トンボ		クロイトトンボ属の一種	0	0	0	0	○
		ハグロトンボsp	1	13	2	3	○
	都VU	ヤマサナエ	0	0	2	3	×
		ダビドサナエ	1	5	6	6	×
		オジロサナエ	0	0	1	1	○
		オナガサナエ	5	3	3	7	○
		ミヤマサナエ	0	2	1	0	×
	都NT	アオサナエ	1	0	6	2	×
		コオニヤンマ	7	26	8	5	○
		ダビドサナエ属の一種	0	0	0	0	○
		オニヤンマ	0	0	1	1	×
	都VU	コシボソヤンマ	6	2	6	6	×
		クロスジギンヤンマ	0	0	0	1	×
	都NT	コヤマトンボ	10	22	10	16	○
	ノシメトンボ	0	0	0	1	×	
	アカネトンボの仲間	0	0	1	0	○	
トンボ以外の水生昆虫		ヒゲナガカワトビケラ	14	—	多	多	○
		ウルマーシマトビケラ	0	—	30	6	○
		ムナグロナガレトビケラ	0	—	5	7	×
		チラカゲロウ	1	—	12	6	○
		エルモンヒラタカゲロウ	6	—	7	5	△
		シロタニガワカゲロウ	13	—	6	—	○
		アカマダラカゲロウ	0	—	25	—	○
		トウヨウマダラカゲロウ属	—	—	13	—	—
		コカゲロウ属	—	—	1	—	○
		カゲロウsp	—	—	—	多	—
		オオヤマカワゲラ	7	—	0	0	×
		カワゲラsp	0	—	1	1	—

EX:絶滅 EW:野生絶滅 CR:絶滅危惧ⅠA類 EN:絶滅危惧ⅠB類 VU:絶滅危惧Ⅱ類 NT:準絶滅危惧
DD:情報不足 *:留意種 —:データ無し ・:非分布

	RD	種名	平成24年 9月9日	平成23年 9月17日	平成22年 8月22日	平成21年 9月13日	平成16年 7月25日
トンボ以外の 水生昆虫		マツモムシ	0	0	0	1	○
		ミズカマキリ	0	0	2	1	×
		ヘビトンボ	2	0	多	5	○
		ヒラタドROMシ亜科の一種	数匹	—	12	3	○
両生類	都VU	ツチガエル(成体)	0	0	1	1	×
	都VU	ツチガエル(幼体)	0	0	0	4	×
	国NT,都VU	トウキョウダルマガエル(幼体)	3	0	1	0	×
	都VU	トウキョウダルマガエル(成体)	1	1	0	0	×
		アカガエル属の一種	—	—	—	—	○
甲殻類	*	ヌカエビ	多	数十	多	30	○
	*	スジエビ	多	2	多	140	○
	外来種	アメリカザリガニ	9	2	12	4	○
	*	サワガニ	4	0	1	1	△
その他		カワニナ	0	0	0	1	○
		シジミ	0	0	0	2	○
		ブラナリア	0	0	1	17	×

EX:絶滅 EW:野生絶滅 CR:絶滅危惧ⅠA類 EN:絶滅危惧ⅠB類 VU:絶滅危惧Ⅱ類 NT:準絶滅危惧
DD:情報不足 *:留意種 —:データ無し ・:非分布

平成 21 (2009) 年、平成 22 (2010) 年、平成 24 (2012) 年データはあきる野市自然環境調査 (ガサガサ調査) による。

平成 23 (2011) 年データは、あきる野市自然環境調査 (調査員によるガサガサ調査による) による。また、水生昆虫調査は、主にトンボやヤゴのみ実施。

平成 16 (2004) 年データは、東京都西多摩建設事務所「平井川生物調査委託報告書」(2005) を参照。△はガサガサ調査箇所下流で確認された種。

◇調査員による秋川ガサガサ調査結果一覧

	RD	種名	小川久保桜公園 上流	ファミリーロッジ 五日市付近	南秋留小学校 下の用水路
魚類	国VU,都VU	ギバチ	1	2	0
	国VU	アカザ	0	2	0
	国VU,都EN	スナヤツメ	0	1	0
	国NT,都VU	カジカ	0	6	0
	都VU	ジュズカケハゼ	0	0	0
	都NT	カマツカ	1	0	1
	都NT	シマドジョウ	12	3	9
	国EN,都VU	ホトケドジョウ	0	1	0
	国内外来種	カワムツ	23	31	多数
	国内外来種	オヤニラミ	27	0	8
	国内外来種	ムギツク	5	0	0
	都CR	アブラハヤ(タカハヤ)sp	0	2	0
		タモロコ	4	0	0
		ドジョウ	0	0	1
		ヨシノボリ	3	0	0
		フナsp	0	0	2
*	ナマズ	0	0	0	
水生昆虫		ハグロトンボsp	0	0	0
	都VU	ヤマサナエ	0	0	1
		ダビドサナエ	0	多数	1
		オナガサナエ	0	0	0
		ミヤマサナエ	0	0	0
	都NT	アオサナエ	2	0	0
		コオニヤンマ	2	1	1
	都VU	コシボソヤンマ	0	0	0
	都NT	コヤマトンボ	3	0	0
		カワトンボsp	0	1	0
	ナベブタムシ	0	2	0	
両生類	国NT,都VU	トウキョウダルマガエル(幼体)	0	1	0
	国NT,都VU	トウキョウダルマガエル(成体)	0	0	1
甲殻類	*	ヌカエビ	0	数匹	0
	*	スジエビ	0	0	0
	外来種	アメリカザリガニ	5	0	9
	*	サワガニ	0	2	5
その他		カワニナ	1	7	多数

EX:絶滅 EW:野生絶滅 CR:絶滅危惧ⅠA類 EN:絶滅危惧ⅠB類 VU:絶滅危惧Ⅱ類 NT:準絶滅危惧

DD:情報不足 *:留意種 -:データ無し ・:非分布

◇主な水生生物

・平井川



カワムツ



シュズカケハゼ

期間中に実施した4回の調査では、国内外来種のカワムツが一定の割合を占め安定しているのに比べ、在来種で生活環境が重複するオイカワやウグイは全く採集されなかった。

調査地点は緩やかな流れの砂礫底が多く、以前はシマドジョウやシュズカケハゼが数多く採集された場所であるが、本調査では特にシマドジョウの数が少なく、シュズカケハゼも年によって数にばらつきが見られた。

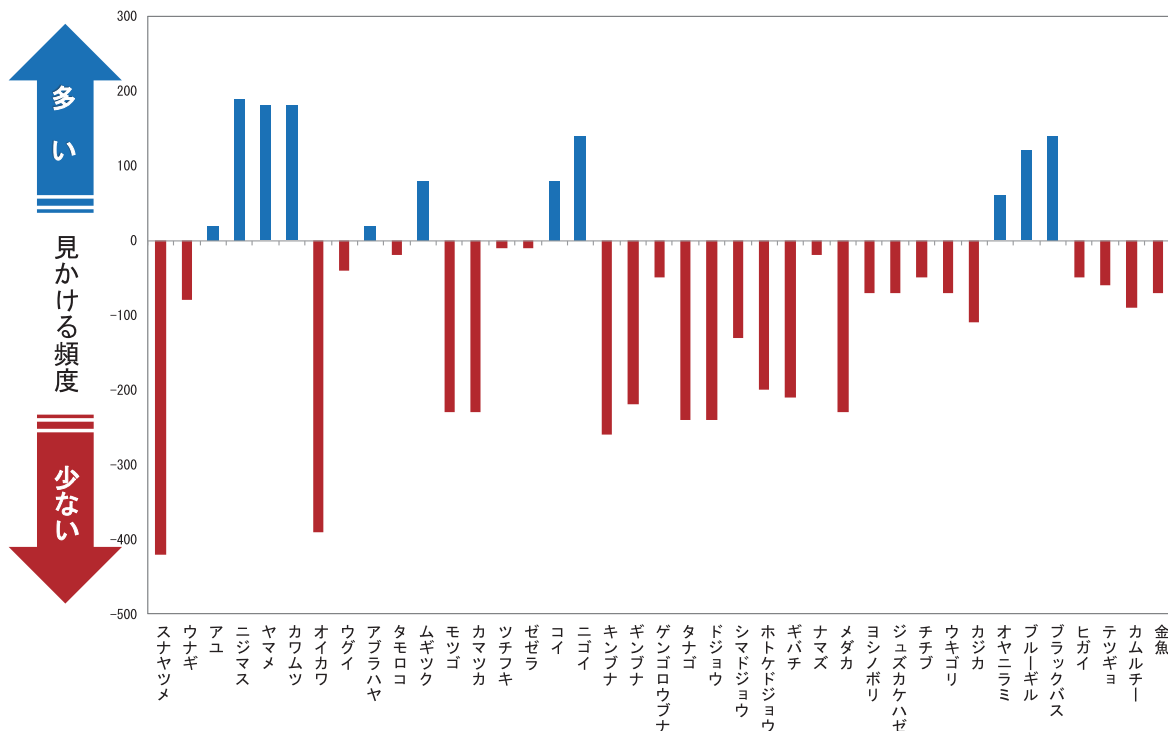
・秋川

3地点での調査では、上流域、下流域ともに国内外来種のカワムツが高い割合を占めた。特に下流域では、オヤニラミ、ムギツクが加わり、国内外来種が圧倒的に多かった。上流域では、近年絶滅が危惧されているスナヤツメが確認できた。

また、留意種であるスジエビとヌカエビが、平井川ではごく普通に見られたが、秋川ではほとんど採集されなかった。

⑦秋川漁業協同組合員アンケート調査

アンケートから見た魚種別増減



このグラフは、過去（過去とは「回答者が見た昔」を基準に回答していただいている。従って、明確な時期を示しているものではない。）を基準に、回答を表のとおり数値に置き換え、各支部の「現在の点数ー昔の点数」を種ごとに合計したものである。

回答項目	点数
よくある	30点
時々ある	20点
めったにない	10点
全くない、わからない	0点

昔に比べて見られなくなった種としては、スナヤツメ、オイカワ、キンブナ、カマツカと続き、昔に比べてよく見られるようになった種としては、ニジマス、ヤマメ、カワムツ、ブラックバス、ブルーギルなどが挙げられ、放流魚及び外来種が多いことが分かる。

3 普及活動

市民参加型の調査を次のとおり実施した。

(1) ウォンテッド調査

市内全戸を対象に哺乳類、両生類、昆虫類、鳥類、爬虫類（ヘビ類）それぞれの目撃情報募集チラシ（P.83 参照）を時期をずらして配布し、その目撃情報を募った。予想以上に多数の情報が寄せられ、市民の関心の高さが示された。情報件数は、次のとおりである。

	哺乳類	両生類	昆虫類	鳥類	ヘビ類	合計
情報数	979	425	231	656	393	2,684
()内は市民情報	(376)	(273)	(136)	(130)	(360)	(1,275)

（調査結果の詳細については、各調査結果一覧を参照）

(2) ガサガサ調査

タモ網を使って魚類・底生生物を捕獲し、種類ごとに大きさと数を記録する調査は、通称「ガサガサ調査」と呼ばれ、市民でも参加しやすい調査である。また調査人数が多いと採集できる種数が増え、生息の有無をより正確に知ることができる。そこで、普及活動を兼ねて市民参加によるガサガサ調査を実施した。また、経年変化を見るために、平井川・新開橋から下流 120m の区間で、ほぼ同様の時期に数年前から調査している市内の団体と協力して実施した。

調査概要は次のとおりである。

場所	平井川新開橋下から下流 120m
対象者	市民(子どもを含む)
募集の方法	市広報、ホームページ及びチラシ
実施日	参加者
平成 21 年 9 月 13 日(日)	29 名
平成 22 年 8 月 22 日(日)	44 名
平成 23 年 9 月 17 日(土)	※増水のため中止(調査員のみで実施)
平成 24 年 9 月 9 日(日)	29 名



市民参加によるガサガサ調査



捕獲された生物の仕分け作業

（調査結果の詳細については、P.125～128 参照）

4 考察・課題

(1) 注目すべき動物

市内に生息する動物の中で、絶滅の恐れがある種及び外来種として生態系への影響が危惧されている種のいくつかを取り上げた。

① 哺乳類

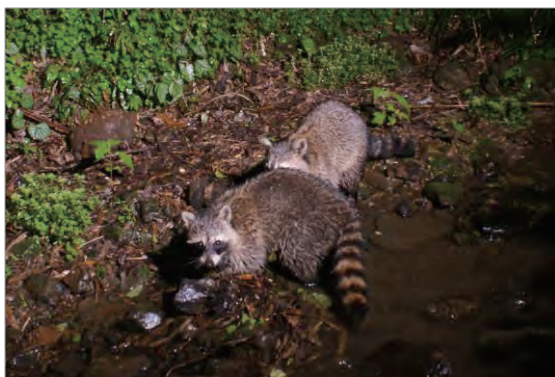
◇ ヤマネ (天然記念物)



今回の調査で、市域西側山地に設置した巣箱を利用中の個体が撮影された。あきる野市の山地で、天然記念物のヤマネの生息を初めて写真で確認できた。ヤマネは、近縁の種が存在していない1属1種の日本固有種で、成熟した森林に生息する動物である。

ヤマネが発見された森林の地域で、現在林道工事が行われており、成熟した森林を生息地とするヤマネへの影響が心配される。また、ヤマネの行動圏は、雄が2ha、雌が1ha弱という研究報告があり、森林環境の変化の他に、行動圏の分断も心配される。林道建設とヤマネ保護との両立を図る必要があり、道路沿いの樹木をできるだけ残して、道路を樹冠で覆う区域を多くするほか、場合によっては、道路上にヤマネ橋を造るなど、ヤマネの移動経路を確保する取組が望まれる。

◇ アライグマ (特定外来生物)



市内の戸倉地区(盆堀)を除く市内全域で生息が確認された。爪痕調査(P.84 参照)、調査結果一覧(P.88 参照)に確認内容を示した。

アライグマは、カナダ南部から中央アメリカにかけて広く生息し、小動物、果実、野菜や人家のごみまで食べる雑食性の動物で、その生息地で得られやすいものを餌にしている。浅い水辺を好むが、順応力が高く、森林、草原、農耕地、市街地など多様な環境に生息できるので、生息域を広げやすい。1970年代のアライグマを主人公としたテレビアニメが放映されて以来、ペットとして数万頭が輸入され、それが逃亡したり、成獣になると狂暴になるので飼いきれずに放獣した個体が野生化して繁殖したとされている。

アライグマは、社寺など人気の少ない建物や、時には人家の屋根裏に侵入し、営巣・育児を行う際、糞尿をその場に放出するので、天井に尿がしみ出すなどの家屋被害が生じる。また、農作物への食害、アライグマ回虫症など病気の媒介、トウキョウサンショウウオやアカガエルなどの希少種を含む小動物の捕食、鳥類の卵の捕食、他の動物との

競合による生態系への影響などが心配される。すでに、あきる野市でも住宅被害、農業被害、生態系被害が発生している。

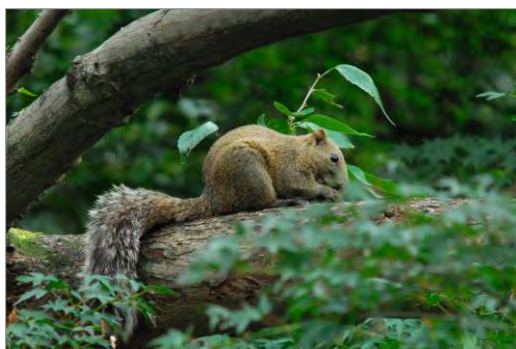
アライグマは、平成 17（2005）年に施行された「特定外来生物による生態系に係る被害の防止に関する法律」（以下「外来生物法」という。）によって特定外来生物に指定され、防除の対象になった。神奈川県では、アライグマ防除計画を策定して一斉防除を開始し、平成 21（2009）年 8 月までに捕獲数が 5,000 頭を超えたと報告されている。東京都では多摩地域の自治体が、鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律（鳥獣保護法）に基づく捕獲許可を得て、農業被害などに対応してきた。

平成 14（2002）年、あきる野市が農業被害に対応してアライグマ 6 頭を捕獲したのが、東京都におけるアライグマ捕獲の最初の報告記録である。その翌年から、西多摩・南多摩各自治体のアライグマ捕獲許可申請による捕獲が始まり、平成 19（2007）年までに約 260 頭を捕獲している。神奈川県の 5,000 頭に比べると微々たるものであり、繁殖による個体数の増加に追いつかない状況と思われる。

都条例によって、平成 18（2006）年に里山保全地域に指定された横沢入地区で、平成 20（2008）年 2 月に、食いちぎられたアカガエルの死体 40 個体余が発見された。田の畔に残された足跡と調査員による無人カメラによる撮影によって、アライグマによる食害と判断された。横沢入里山管理市民協議会などによる東京都環境局へのアライグマ防除要請によって、都による調査捕獲が始まり、平成 25（2013）年 2 月現在 10 数頭が捕獲されている。

あきる野市は、平成 24（2012）年 11 月から生態系被害に対するアライグマの捕獲を開始した。まず、横沢入地区周辺から地域住民の協力を得て捕獲を開始しており、市内全域を対象にした捕獲体制に発展して継続される予定である。しかし、アライグマの行動域は、地形や食物などの条件にもよるが、1 晩に 5km 位移動することがあるとの研究報告もあり、多摩地域全域での実施が期待されるところである。

◇クリハラリス（台湾リス）（特定外来生物）



平成 21（2009）年 10 月末に、ウォンテッド調査のチラシが全戸配布されて数日後に、市民から 7 件のクリハラリスの情報が市に寄せられた。引田地区、淵上地区、上代継地区、下代継地区と続く秋川左岸崖線緑地帯からの目撃情報であった。翌年 2 月、調査員によって、落葉後のケヤキ林で 6 個の樹上巣が確認され、2 頭のクリハラリスの追尾行動

が見られた。

クリハラリスは東南アジア、中国南東部、台湾に分布するリスで、クリハラリスという和名は、背面が灰褐色で腹面が赤いものに対してつけられた名であるが、日本に持ち込まれて野生化したものは、台湾南部に生息し地域変異で腹面が淡い灰褐色の個体なので、一般には台湾リスと呼ばれている。

クリハラリスは、樹木の樹皮剥ぎ、果実の食害、住宅の戸袋や電話線の損壊など、農林業被害、生活被害を引き起こす。平成 17 年に施行された外来生物法によって特定外来生物に指定され、防除する対象になった。

クリハラリスは、昭和 10（1935）年に伊豆大島で野生化して繁殖し、人によって運ばれた飼育個体などが野生化して繁殖した。各自治体や研究者の捕獲努力にも関わらず、その後、神奈川県、静岡県、和歌山県などの太平洋沿岸を中心に九州まで分布を広げつつある。国立環境研究所の確認記録によると、最近の生息確認は、平成 2（2008）年熊本県宇土半島、平成 23（2011）年東京都あきる野市、埼玉県入間市となっている。あきる野市の生息確認は、市民情報及び調査員による調査並びに独立行政法人森林総合研究所の捕獲調査（平成 23（2011）年に 14 頭が捕獲）の記録がもとになっている。

あきる野市へのクリハラリスの定着時期は、地元住民の聴き取りでは正確には把握できなかったが、10 年位前にはすでに存在し、以前はよく餌を与えたが今はやめているという話もあった。秋川左岸崖線緑地帯の樹林は、上流部では山田地区、引田地区の住宅地などで、約 2km 下流部では国道 411 号線や圏央道で分断されているため、当初は、分布地拡大の危険は少なく、増加を続けるアライグマ情報への対策が急務と判断されたが、現在は、独立行政法人森林総合研究所とあきる野市が協力してクリハラリスの捕獲を行っているところである。

今後は、市民に目撃情報の提供協力をさらに求め、捕獲から逃れた個体の確認、隣接地域への移出個体の有無の搜索をどこまで継続できるかが、クリハラリス根絶への鍵になると考えられる。

◇カヤネズミ（都指定絶滅危惧種）



カヤネズミは、平成 22（2010）年 3 月に改定された「東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）～東京都レッドリスト～2010 年版」（東京都環境局）で、それまでの希少種から絶滅危惧Ⅱ類にランクが上がった種である。西多摩において他に絶滅危惧Ⅱ類以上に指定されている哺乳類は、モリアブラコウモリ、ツキノワグマ、オコシヨ、カモシカの 4 種のみであり、カヤネズミは、まさに絶滅の危機に瀕した種となった。

まさか絶滅の危機に瀕した種となった。

そうした中、本調査によって新たに秋川や多摩川の河川敷でも生息が確認された。これまでに生息が確認されている平井川の河川敷及び横沢入地区などの休耕地を含めると、市内東部を中心に生息地が点在していることが分かった。あきる野市は、東京都において数少ない貴重なカヤネズミの生息地といえる。

しかし、調査した河川敷のカヤ原の環境は、必ずしも良好とは言えなかった。一つには、外来種のおオブタクサやアレチウリなどが侵入し、営巣植物であるオギやススキの

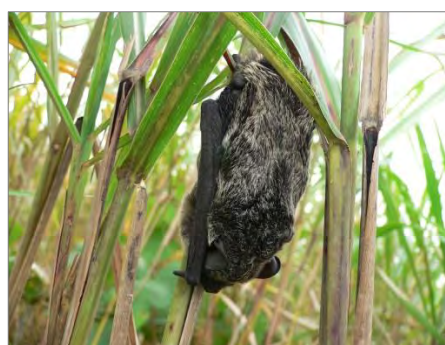
倒伏が目立ったこと、もう一つには、河川敷は増水によってカヤネズミの生息地が一気に失われる危険性があり、増水時に避難できる連続した緑地が必要であるが、さまざまな人工物によって生息地が孤立化していることが挙げられる。

さらに課題として挙げられるのは、草刈りの問題である。河川敷や休耕地の一部では、公共機関をはじめ、地域住民及び地権者によって草刈りが実施されている。草刈りは、生活環境や植生管理の面から大切な役割を果たしているが、実施時期や方法によっては、カヤネズミの繁殖に大きな影響を与える可能性がある。市民への意識啓発と協力が望まれるところである。

◇コウモリ類（国・都指定絶滅危惧種を含む）



ヤマコウモリ



ヒナコウモリ

コウモリ類は翼手目に属する哺乳類で、日本で約 35 種の生息が確認されており、げっ歯目（ネズミやリスの仲間）の次に種類の多い哺乳類である。しかし、夜行性で観察が難しく、種の同定も難しい。そのため冬眠や季節移動による生息地の移動など、その生態については、まだまだ研究が進んでいないのが実情である。

市内のコウモリ類については、東京都高尾自然博物館研究報告第 21 号別冊「東京都奥多摩地域のコウモリ類」に報告されている。

本調査では、上記の調査報告をもとに、各種類が飛翔する場所やねぐらから出巢するものをバットディテクターを用いて周波数による種の推定と目視、写真撮影による確認を行った。

これにより市内の河川上空を中心に、アブラコウモリ、モリアブラコウモリ、モモジロコウモリの生息を確認した。網代地区の弁天山にある洞窟内でキクガシラコウモリ、養沢地区（上養沢）の鍾乳洞内でコキクガシラコウモリの生息も確認した。

上記5種のほか、今回の調査期間以外でヤマコウモリ、ヒナコウモリの生息も確認している。キクガシラコウモリやコキクガシラコウモリは森林内で採餌するのに対し、ヤマコウモリ、ヒナコウモリは、ナイター照明の点灯している橋の上空やグラウンド上空などの比較的高い位置で採餌している。アブラコウモリ、モリアブラコウモリは、川沿いや空き地、田畑の上空の比較的低い位置を飛翔し採餌しているのが確認できた。モモジロコウモリは、秋川の水面すれすれに飛翔し採餌している様子が撮影された。

コウモリは一晩で体重の3分の1の重量の昆虫を捕食しているため、生息には豊かな環境が必要である。東京近郊でこれだけ多くのコウモリ類が生息しているのは、秋川溪

谷が水生昆虫の多い河川であることに理由があるのではないかと考えられる。

モリアブラコウモリは東京都の絶滅危惧Ⅱ類、ヤマコウモリは準絶滅危惧種に指定されているが、両種ともねぐらに樹洞を必要とする種であり、樹洞のある大木の存在が重要な条件となってくる。

コウモリ類の生息に必要な河川環境の保全や、大木の保存樹木指定による保護などが望まれる。

②両生類

◇トウキョウダルマガエル（国指定準絶滅危惧種 都指定絶滅危惧種）



トウキョウダルマガエルは、産卵期が終わると水辺から離れるアズマヒキガエル、ニホンアマガエル、ニホンアカガエル、モリアオガエルなど他の多くのカエルと異なり、1年を通して水辺で生活するといわれている。また、産卵場所は、カジカガエル、ナガレタゴガエルのような流水ではなく、田んぼ、池、湿地などの止水である。そのため、止水性の水辺である湿地や池の減少に伴い生息数は全国的に減少している。

市内においても水田が減少し、湿地の乾燥化が進む中、トウキョウダルマガエルは「普通のカエル」から「珍しいカエル」となった。今回の調査においても、市民から寄せられた情報は2件のみであった。その内の1件は、住宅地にある個人宅の小さな池で確認された。繁殖しているかどうかは不明であるが、いずれにしろ厳しい環境の中で辛うじて生き延びてきた個体といえる。

調査員の調査で確認できたのは、秋川及び平井川沿いの田んぼや湿地、菅生地区の池であった。特に湿地はわずかな面積しか残されておらず、年によっては干上がる危険がある。

市内のトウキョウダルマガエルを絶滅させないためには、水田の維持と湿地環境の保全に向けた取組が望まれる。

◇トウキョウサンショウウオ（国・都指定絶滅危惧種）



市内のトウキョウサンショウウオの生息状況については、市民団体が平成5(1993)年から継続的に調査を行っている。今回実施したウォンテッド調査では、民家の池や民家脇の水路、民家裏の林内にある小さな水たまりなど、市民情報ならではの新たな生息地が発見された。しかし、それらの生息地を確認したところ、周辺の開発が進み、生息地が隔離されていたり、流入する水が減少し乾燥化が進んでいる、ごみの投棄や上流部の開発などで流入する水が汚染されて

減少し乾燥化が進んでいる、ごみの投棄や上流部の開発などで流入する水が汚染されて

いるなど、産卵場所の環境が悪化しているケースが多く見られた。

平成 23（2011）年 3 月に、市民団体の協力を得て、市の森林レンジャーあきる野と共に、産卵が確認されている池の一つで溜まった土砂を取り除く作業を行った。市内には、他にも同様の作業をすることで、産卵環境を維持できる場所が各所にある。今後、計画的に作業を行い、産卵地を保全することが望まれる。

また、アライグマによるトウキョウサンショウウオの食害は、各地で報告されているが、本調査中にも、アライグマの食害と思われる成体の死骸が数か所で確認された。産卵場所へのアライグマの侵入防止対策は、すでに市民団体を中心に試されているが、特効的な手立てはなく、特定外来生物であるアライグマに対する捕獲事業の充実が期待される。

③昆虫類

◇オオムラサキ（国指定準絶滅危惧種）

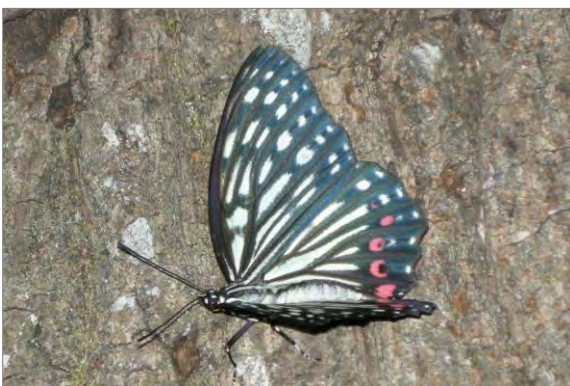


オオムラサキは日本の国蝶であり、里山を代表するチョウである。市内では A、B 地区で幼虫、成虫が確認できた。成虫は隣接する C 地区の一部でも見つかった。

現在の市内の環境は、生息に問題はないと考えられるが、オオムラサキの市内での生息を維持するためには、オオムラサキに焦点を合わせた保護策が必要になっている。具体的には、幼虫の食樹であるエノキの保護管理及び幼虫が越冬する落ち葉の保全で

ある。幼虫のひそむエノキの落ち葉を掃いたり焼却すると、越冬に影響する恐れがある。すでに市内の樹数は少ないので、行政による保護樹としての指定と落ち葉の管理についての周知、啓発が必要である。また、成虫はクヌギやコナラを主体とした雑木林で生活するので、今後、雑木林の適正管理を推進し、生息環境を維持することが必要である。

◇アカボシゴマダラ（外来種）



アカボシゴマダラは、中国大陸から人為的に持ち込まれたと考えられており、要注意外来生物に指定されている。平成 7（1995）年に当時の埼玉県浦和市で野生化した個体が初めて発見され、その後関東地方を中心に分布を広げてきた。今回の調査で、近縁種のゴマダラチョウと同じくらいの目撃情報数があり、あきる野市においても定着した生息状態になっていると考

えられる。幼虫がエノキを食樹（食草）としているので、同じエノキを食樹とするオオムラサキ、ゴマダラチョウとの競合が危惧されている。

④魚 類

◇ギバチ（国・都指定絶滅危惧種）



ギバチは、水のきれいな浮石の下に潜んでいることが多く、カジカと並んで清流を代表する魚である。近年、生活排水の流入による水質の富栄養化、水源林の荒廃による水量の減少、河川工事による土砂の堆積などによって、ギバチが生息できる河川環境が減少し、環境省及び東京都の絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。市内においてもギバチの絶滅が危惧されており、今回の調査においても、減少傾向がうかがわれた。平井川のガサガサ調査で採集された全魚類におけるギバチの比率をみると、平成 21（2009）年 7%（5 匹）、平成 22（2010）年 6%（10 匹）、平成 23（2011）年 0%（0 匹）、平成 24（2012）年 8%（10 匹）となっている。また、4 年間に採集されたギバチの大きさを見ると 16cm 1 匹、8～5cm 2 匹、5cm 以下 22 匹と、成魚がわずかで稚魚～若魚の割合が圧倒的に高い。秋川漁業協同組合のアンケート調査においても、ギバチは昔に比べて見られなくなったという回答が多かった。

平成 15（2003）年から平井川で毎年「ガサガサ調査」を取り入れた自然観察会を行っている市民団体の記録によれば、平成 16（2004）年に採集された全魚類におけるギバチの比率は 18%（本調査と同一区間である新開橋下流）、平成 19（2007）年では 25%（本調査よりやや上流の南小宮橋下流）となっており、数年前は高い割合を占めていたことがわかる。

◇オヤニラミ（国内外来種）



オヤニラミは、水深があまり深くなく、緩やかな流れで水草の生える場所を好むと言われている。環境省の絶滅危惧Ⅱ類に指定されているが、本来、西日本にだけ生息する種であり、市内で見られるオヤニラミは放流に由来する国内外来種である。

市内では、秋川中下流に定着していることが知られているが、今回、調査員によるガサガサ調査で確認され、下流地点では全魚類におけるオヤニラミの比率が 36%にもなった。平井川においては、定期的な調査を行っている市民団体が平成 21（2009）

年7月1日に初めて確認したという報告がある。本調査でも、平成21(2009)年9月13日のガサガサ調査で13匹(全魚類の18%)が採集されたものの、平成22(2010)年1匹(同0.6%)、平成23(2011)年0匹、平成24(2012)年0匹となっており、平井川では定着しなかった可能性が高い。

今回の調査では確認されなかったが、市内で発見されている特定外来生物の魚類としては、コクチバス(通称:ブラックバス)とブルーギルがいる。秋川漁業協同組合によれば、コクチバスは秋川下流域で確認情報があり、ブルーギルは多摩川河川敷(多摩橋下流)の池に定着している。

(2) 注目すべき環境

①水辺環境

水辺には池、沼、河川の他に、谷戸や崖線に浸み出した湧水が作り出す湧水湿地、石積みや木杭で作られた用水路、水田等があり、水辺は絶滅危惧種が集中する環境のひとつといわれる。本調査で生息が確認された絶滅危惧種であるトウキョウサンショウウオ、トウキョウダルマガエル、ニホンアカガエル、ヤマアカガエル、アカハライモリ、ホトケドジョウなどは、いずれも水辺環境を必要とする種である。

こうした水辺環境は近年全国的に激減しているが、あきる野市もその例外ではない。市内に残されたわずかな水辺環境を今後どうやって保全をするかは、多くの生物の絶滅の是非に関わる重要課題である。

本調査で訪れた市内にある水辺環境のいくつかを紹介する。

◇中高瀬耕地周辺(平井川流域・草花地区)

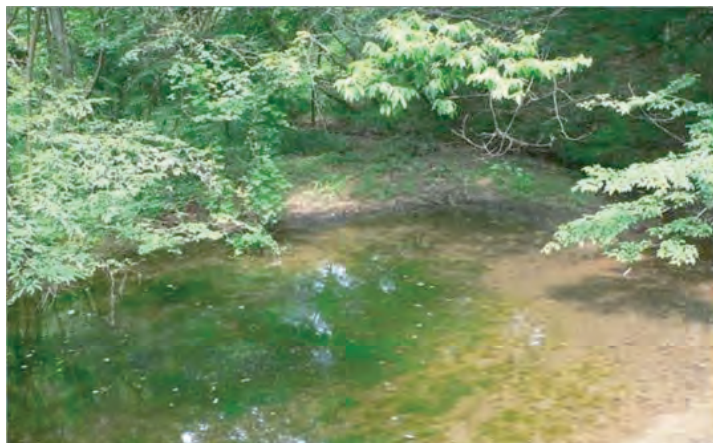
新開橋から平高橋までの平井川左岸に広がる中高瀬耕地では、面積は減少したものの、今も農家の努力によって貴重な水田が営まれている。また、中高瀬耕地南側の平井川右岸には、秋留台地からの地下水が湧き出る、平井川沿いで最も水量の豊富な湧水池がある。本調査では、このエリアでトウキョウダルマガエルの生息が確認された。現在、中高瀬耕地を縦断し、湧水池のある崖線緑地を分断する都道の建設が進められており、自然環境に配慮した保全対策が期待される。

◇草花丘陵(草花地区~菅生地区)

草花地区から菅生地区に広がる草花丘陵には、いく筋もの沢が流れている。今回の調査では、沢の水を求めて集まる様々な哺乳類や野鳥の姿が無人カメラでとらえられた。また、調査員によって観察例の少ないヤマシギとタゴガエルが確認された。

沢沿いにできた水溜りでは、トウキョウサンショウウオやホトケドジョウの生息が確認された。しかし、沢の多くは水量が乏しく、水溜りが干上がり、沢が伏流化してしまうことも少なくない。

また、菅生地区にも、沢の水が溜まってできた池があり、トウキョウサンショウウオ、モリアオガエル、ヤマアカガエル、ホトケドジョウの他、止水性トンボ各種が確認された。



草花丘陵にある貴重な水辺環境のひとつ

◇旧五日市町地区の田んぼ・休耕田

網代地区の弁天山の麓に古くからの田んぼが存在しており、また池として維持されている場所は広い開放水域を持ち、トンボや水生昆虫の貴重な生息地となっている。

横沢入地区は大悲願寺の北側にあり、古くから山の水を田に引き込んで谷津田が営まれ、長い間里山として利用されてきた。しかし、近年の農業後継者の不足により、休耕田の草地化や雑木林や植林地の荒廃が進んでいたが、平成 18（2006）年に東京都で第 1 号の里山保全地域に指定され保存されることとなった。現在は市民のボランティア団体などが、東京都と協議しながら、水路や林道の整備、水田利用、湿地部分の維持などを行っている。

小庄の田んぼは五日市地区の秋川橋上流部にあり、秋川の水を引き込んで開墾された古くからの田んぼである。昭和 30 年代までは、一面の水田であったが、減反で畑利用が多くなっていった。近年は農業従事者不足で放棄畑や相続による畑の細分化などが増え、パッチワーク状に利用されているが、最近水田が増えつつあり、市内で珍しくなったトウキョウダルマガエルも多く生息している。今回の調査期間内では人員、時間の不足で詳しく調査できなかったが、今後は注目していきたい。

旧五日市町地区で古くから記録が残る田んぼは、周囲が山や河川と接しており、住宅や大きな道路などで分断されていない。保全地域や農業振興地域内の農用地は当面開発の心配はないが、生物の生息地として局所的に孤立化することのないよう、配慮する必要がある。

◇河川敷の水溜りと湿地

平井川、秋川及び多摩川の河川敷には、伏流水や湧水が溜まった水溜り及び湿地が見られる。今回の調査では、そうした水溜り及び湿地で、ヤマアカガエル（成体、卵塊、幼生）、トウキョウダルマガエル（成体）、ミズカマキリ、止水性のトンボのヤゴなどが確認された。水田が減少した現在、河川敷の止水域は両生類や昆虫の重要な生息地になっている。

◇山際の湧水地及び池など

山際の小さな沢の出口に小規模の田んぼの跡や湿地が、市内各所に存在しており、貴重な水生生物の生息場所になっている。こういった場所は気づかぬ間に、埋め立てられ

て宅地化されたり、資材置場などになっていることも多い。

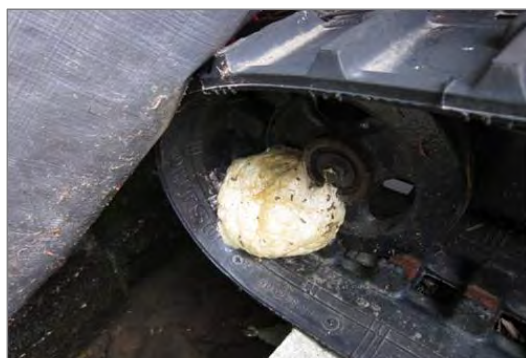
また、社寺は境内や裏手に池を持つことが多く、モリアオガエルやトウキョウサンショウウオの産卵場所を提供している。

◇小さな生息地

住宅の庭やベランダに放置されている発泡スチロールの箱や古い水ガメ、畑に置いてある使わなくなった風呂桶などに水が溜まり、トンボ（昆虫類）やカエル（両生類）の生息地となっている。林野に近いところでは、モリアオガエルの産卵場所にさえなっていた。ある家では水ガメを用意し、毎年トウキョウサンショウウオに産卵場所を提供している様子が見られた。また、常に水が流れている側溝の中やその上に置いてあった機械にも、モリアオガエルが産卵していた。



水ガメを利用して産卵した
トウキョウサンショウウオ



側溝の上に置いてあった機械に
産卵したモリアオガエルの卵塊

②崖線緑地帯

秋留台地の南端と秋川との間に細長く形成されている秋川左岸崖線緑地帯は、崖面に、ケヤキ、アラカシ、シラカシ、イヌシデ、スギ、ヒノキなどの高木が林冠を形成し、亜高木のヤブツバキ、低木のアオキなどが複層構造を構成する樹林に、竹林が縞模様のように入り込んだ樹林帯で形成されている。コナラは高木が少数あるだけで、長い年数放置されてきたと思われる樹林が、緑の回廊（コリドー）を形成している。

上流部は、秋川渓谷のV字谷の崖面の樹林帯に接続し、河川敷が広がる中流域の山田大橋付近から下流へ、河川敷の外側を縁取るように崖線緑地帯が約 6km 下流の多摩川合流地点近くまで続いている。崖線の上側は古い集落に新しい住宅地が加わり、下側の河川敷は田畑に利用されたり、深く台地が浸食されて古くから集落が発達した場所もある。近年、崖線部での造成や道路の拡幅により、緑地帯が分断されるケースも見受けられる。

緑地帯に設置した熱センサーカメラには、タヌキ、アナグマ、キツネ、テンなどの里山の哺乳類のほかに、外来生物であるハクビシンやアライグマが度々撮影され、一部の区域にはクリハラリスの繁殖集団が見られた。このような環境では、これら哺乳類の生息を可能にする「自然」が存在していることを示している。

近年、緑地帯は、開発や高木伐採、道路拡幅などによって分断が進んでいるが、あきる野市の山地の森林と住宅地の公園樹林や屋敷林を結ぶ緑の回廊として、多くの種類の野生動物たちの移動経路となっていたり、生活の場所としての役割を果たしてきた。

今後は、崖線緑地帯の自然に配慮した工事の施工や、分断された緑地帯を動物橋や動物トンネル、緑の迂回路などの造成によって、緑の回廊として生かしていくことが望まれる。緑地帯と狭い公園樹林や屋敷林を街路樹などで結び合わせて、多くの動物たちの生息圏を形成し、住宅の庭先にニホンリスが訪れる街など、あきる野市環境基本計画の施策である「身近な自然を生かしたまちの創造」を具体化させる条件は、まさに身近に存在する。



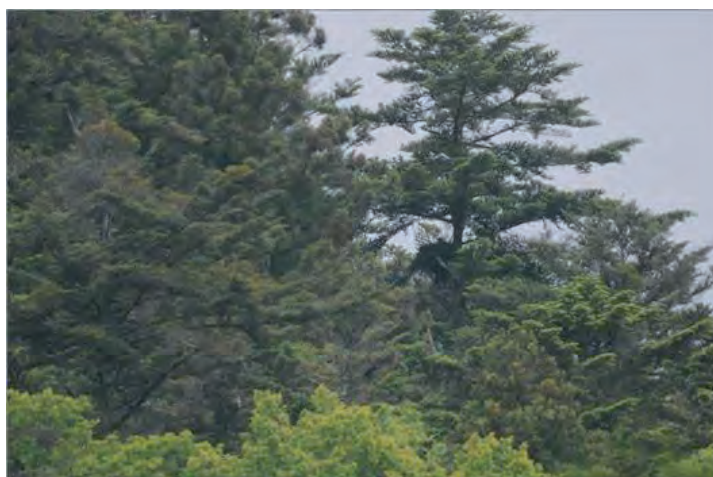
秋川左岸崖線緑地帯

③モミ・ツガ林

市域西側の山地の尾根筋などには、規模は様々だがモミを主にした自然林が残っている。また山林の境界に目印として伐採されず残されたモミの大木が各所に点在している。

モミ林は同じ針葉樹でも植林されたスギやヒノキの林と違い、様々な大きさの木が存在し、比較的林内に光が多く差し込み、林床の草本類の種類も多く、落葉樹も混ざり、変化に富んだ環境となっている。モミやツガは大木になるにつれて、枝が水平に伸びる。こうした横枝を利用して猛禽類のクマタカ、オオタカなどが営巣したり、空洞になったモミの洞をフクロウが繁殖に利用していることが確認されている。鳥類以外にも、針葉樹の種子を好むリス科やネズミ科の哺乳類などに貴重な食料を提供している。

植林に適さずかろうじて残された林であるが、社寺林に匹敵する貴重な林であり、むやみに伐採されないような施策が必要である。



戸倉地区（盆堀）